

神の河は水で満ちている

この歌の文脈は、「早魃が訪れ、畑は穀物成長について大きな不安に包まれ、飢餓の幻影が漂っていた。だが、今や祈りが聞かれたのである。乾燥した草原は緑なす牧場となり、新芽のもえる畑になった。会衆は、不安の時に願い約束した誓いを果たすべく神殿に集まった。この詩の祭儀的な調子と共同体的な性格とは、このような所から説明される。(A.ヴァイザーATD152 頁) と言っています。米国のヴァージニア州リッチモンドのユニオン神学院のメイズ先生も、この詩を、喜びあふれる「賛歌」であると理解しています(詩編 340 頁)。この詩は神を神殿礼拝において現れる神として、世界の神として、全地の神としてほめたたえており、米国では収穫感謝礼拝で用いていると言います。

私の書齋には詩編 65 編 9 節(新共同訳)の書が掛けられています。アサ会に関係する久布白直勝の妻落実の書です。私たちの感覚からすれば川に水が流れているのは当たり前ですが、降雨の少ないイスラエルでは、普段、川には水がなく「ワジ」といい、普段は水路が残っているだけです。小川もまたそうで、鹿が谷川の水を求め、そこは「涸れた谷」であったというようなイメージが詩編 42 編でした。しかし、この 65 編では干ばつではなく、「あなたは地に臨んで水を与え、豊かさを加えられます。神の水路は水をたたえ、地は穀物を備えます。」と歌われています。10 節以下はまさに豊作の歌で、新年礼拝にふさわしいのです。

1. いのちの水を求めて

水は「いのち」にとって必要不可欠です。少しの塩と水があればかなり生き延びることもできるようです。現在の日本社会はエンタメ、バラエティで天気予報やニュースまでオチャラケと関係しています。面白く、おかしくないと「受けない」からでしょう。イジメすれすれの「お笑い」を喜んでいます。しかし、その背後には魂の「渴き」、不安、孤独、孤立が支配しているかに見えます。成人式でなぜ若者はいかに「ハジケル」のでしょうか。それは普段、抑圧があるからでしょうか？ 預言者アモスの言葉に耳を傾けましょう。「見よ、その日が来ればと/主なる神は言われる。わたしは大地に飢えを送る。それはパンに飢えることでもなく、水に渴くことでもなく/主の言葉を聞くことのできぬ飢えと渴きだ。」私たちは水を得る泉(living water)に根差して生きているか、渴きをいやす水源に根を伸ばしているかが問われるでしょう。ヨハネ 4:13-14「この水を飲む者はだれでも渴く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわきでる」。

2. 神に向かい沈黙は賛美である：詩編 65：2～3

「沈黙してあなたに向かい、賛美をささげます。シオンにいます神よ。あなたに満願の献げものをささげます。祈りを聞いてくださる神よ/すべて肉なるものはあなたのもとに来ます。」私が愛読している青木澄十郎の『詩篇の研究』は、2 節を「神よ、シオンにて汝に向ひ**沈黙は賛美なり**」と翻訳しています。コロナウイルス感染拡大の脅威の中で、「沈黙は賛美なり」という言葉に心惹かれます。讚美歌を精一杯歌えないからです。口語訳は「神よ、シオンにて、あなたをほめたたえることはふさわしいことである」と翻訳し、現在ではその翻訳が主流であるかとは思いますが、しかし、新共同訳が「沈黙してあ

なたに向かい、賛美をささげます」を採用しています。どうしてそうなるかと言いますと、Dūmīyāh というヘブライ語は、活用形の一部を欠いており (defect.) どう読むかの余地があるからです。dāmam (dwm) とは、沈黙することを意味しており、詩編 4:5 では「おののいて罪を離れよ。横たわるときも自らの心と語り/そして沈黙に入れ。ふさわしい献げ物をささげて、主に依り頼め」と言われています。

そこで、沈黙がなぜ賛美なのかを考えてみましょう。あるヘブライ語辞典には、dāmam ,dūmīyāh の用例として、詩編 62:2 を引用し、「汝にむかって沈黙の放棄・断念は賛美である」(silent resignation is praise) とあります。先ほど引用しました青木澄十郎は、これは、「絶対服従の意もあり反省精思の含みもある」と語っています。(基督教文書伝道会、昭和 34 年ママ、151 頁) コロナウイルス感染拡大下、現在の教会では讃美歌を歌えない、歌わない教会もあります。賛美と讃美歌とは違います。讃美歌は発声を以って賛美する賛美の一つのかたちです。かえって、あることを断念すること、棄てること、沈黙することによって濃密な交わりが起こることがあります。ある時、全国青年大会の講師をしたとき、天城山荘の食堂の一段下の部分に青年たち 90 名余が座って食事をしていました。余りに騒がしいので、一段上のフロアで食事をしておられる人たちに迷惑をかけないか心配になり、アコーディオン式の間仕切りを少し開けて覗いてみました。200 人以上の聾啞者の皆さんが全く無声の中で、手話で凄まじい対話をされていました。発声されない濃密の対話があるわけです。昨年ある教会に呼ばれて説教をしましたが、讃美歌を歌いませんでした。その時の会衆の辛さとオルガンに耳を傾ける素晴らしさに感動しました。ああ、日ごろ手話通訳をしている教会は素晴らしい。声を出さなくても体で表現できたらいいねと言ってきました。むろん、讃美歌を大きな声で歌いたい。詩編 30:13 は、「わたしの魂があなたをほめ歌い、沈黙することのないようにしてください」(wəlō yiddōm ,dām の kal fut. 3 pers. sing masc.) と歌い、主なる神に向かい (ヘブライ語 dwm とは違いますが)、詩編 28:1 「沈黙しないでください。あなたが黙しておられるなら ('al tehəraš, pen tehšeh /わたしは墓に下る者とされてしまいます) と嘆き、叫んでいます。全能者であり、憐れみ深い神は語っておられます。神と人との深い断絶と橋渡しの恵みの中で、沈黙することが賛美であれば、私たちにはいろいろな工夫があることでしょう。私たちは、不条理、不平等、苦悩、悲しみに満ちたこの世界において、憐れみ深い義なる審判 (ミシュパート) を実現してくださる、イエス・キリストにおいて語られた神を賛美することを辞めるわけにはいきません。

3. 一人ひとりを大切に

最後に、一人一人を大切にしようという呼びかけで結びたいと思います。「祈りを聞いてくださる神よ/すべて肉なるものはあなたのもとに来ます」。すべてのものです。抽象的な「すべて」ではなく、私たちが出会っている、出合わされている「一人一人」です。教会に集う高齢の方々、そして、年老いていく私たち、すべての肉なるものです。今日、まさに、見えなくされている交わりをどのように豊かに見えるようにするかが課題でしょう。Social distance を取れというけれども、正しくは physical distance (身体的距離) なのでしょう。人は決して独りでは生きられない、他者と共に生きるものです。人は独りではないと教会は語り、一人で生きなくて良いと語って来ました。バプテスト教会はマタイ 18:20 「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」(マタイ 18:20 synēgmenoi eis to emoi onoma, ekei eimi en mesō autōn) を大切にしてきました。教会とは、私が教会に必要であること、私が仕えるべき人がいるということより以上に、私のために祈ってくれる人

がいること、「教会の交わりが私には必要である」と心から言えるかどうかの事柄なのではないでしょうか?!一人で生きられると思ひ、自分が教会や人に仕えているのであるという傲慢を砕かれ、イエス様から仕えられ、祈られ、いかに少ない人数であれ、教会の交わりから祈られ、仕えられていることを喜びたいと思ひます。それこそが、濃密な沈黙、豊かな讃美の本質ではないでしょうか。